

淡路花博25周年記念花みどりフェア第2回企画委員会 議事録

1 日時 令和5年12月26日（火）13:30～15:30

2 場所 兵庫県庁3号館6階第1委員会室

3 委員総数及び出席委員数

委員総数 11名

出席委員数 10名

4 出席委員の氏名

中瀬勲、入谷芳郎、門野隆弘、高木俊光、田中まこ、田辺真人、原口晴美、堀内照美、三井雄一郎、光成麻美

（参考：欠席委員 古田菜穂子）

5 検討議題

- (1) 開催概要について
- (2) 淡路島を取り巻く環境の変化とフェアの方向性について
- (3) 開催理念と開催テーマについて
- (4) 展示・行催事計画の基本的な考え方について
- (5) 広報計画の基本的な考え方について
協賛・収益の基本的な考え方について

6 議事の概要

議事について、事務局より資料1、2、3に基づいて説明を行い、古田委員から事前に提出された意見を紹介した後審議を行った。委員の主な意見は以下のとおり。

【検討議題1、2、3】（資料1/P1～P7）

（中瀬委員長）

古田委員の意見は、仰るとおりである。SDGsだけではなく、より広げて考えてほしい。グローバルに押しつけられるのではなく、グローバルに押し返すというぐらいの迫力が欲しい。

（中瀬委員長）

3月20日から4月27日という開催期間は誰が決めたのか。3月は寒く、自然の草花にとってはしんどい時期である。4月20日を過ぎてようやく桜や木蓮が咲いてくる。この時期が駄目だということではなく、このタイミングならどんな草花があるのかということをしっかり考えなければならない。逆に、これを逆手にとった新しい提案を考えてほしい。普通のプロが入っ

ていれば、こんな時期には設定しない。

(高木委員)

5ページの内容は目指すべき方向性としては重要なことが書かれていると思うが、この内容をメイン会場で具現化することを考えると、かなり難易度が高いのではないか。開催理念や開催テーマと、3つのメイン会場でのイベントとが乖離しないよう、踏み込んで想定しておく必要がある。

(事務局)

基本計画において理念や方向性を示したうえで、実施計画において具体的な内容を決めていくという形で進めていきたい。理念の具現化という点については、メイン会場においても、展示ブースや体験コーナーを設けることで対応していきたい。

(中瀬委員長)

5ページの表の右側にもう一枠作り、想定される具体例を示してはどうか。

(高木委員)

誰がその事業を実施するのかといったところまで含めて想定をしておかなければ、実際に会場に行ったときに、理念や開催テーマを体感できない可能性がある。基本計画としてはこれでよいかもしれないが、具体的な実施計画に落とし込めないのではないか。

(中瀬委員長)

我々の役割は、基本計画を作成したら終わりか。

(事務局)

皆様には実施計画の策定にも携わっていただく。基本計画については2月の実行委員会で決定するが、並行して、同時期に企画委員会も招集し、実施計画の具体的な内容を検討していただく。その後、5月の実行委員会で実施計画を決定する予定である。

5ページについては、委員長ご指摘のとおり、具体的な内容をいくつか挙げさせていただく。内容については、当委員会の閉会后に、委員長と調整させていただきたい。

(中瀬委員長)

それでよいかと思う。基本計画を作成して実施計画ができるまでの間に全部飛んでしまわないよう、議論が熱いうちに記載しておくべきである。詳細は必要ないが、参考程度に記載しているほうがよい。

(田中委員)

基本的なことになるが、AWAJI島博と、花みどりフェアでは、予算等の開催規模はどちらがどの程度の差があるのか。

(事務局)

開催期間については、花みどりフェアの39日間に対して、AWAJI島博は万博の開催期間中となっており、かなり長期である。開催テーマについては、花みどりフェアは人と自然といったところに集約されるのに対し、AWAJI島博はより広いテーマを扱う。予算については、花みどりフェアは警備費等の経費も全て含んで3億円と少しである。AWAJI島博はどうか。

(高木委員)

AWAJI島博には、専用の予算はほぼない。観光協会が兵庫県や島内3市からいただいている通常予算のうちから少し切り分けているだけというのが実態である。

(田中委員)

AWAJI島博のほうが開催期間は長い、予算的には花みどりフェアの方が多く、短期集中で開催するというイメージか。

駐車場は減っている中、3つのメイン会場に加え、サテライト会場もあるということだが、そもそも淡路島の場所すら知らないような方々を想定すると、淡路島だけでも精一杯なのに、会場が多すぎるとイメージしづらいのではないか。例えば、昔の大阪万博のように、ここで開催しているという強いイメージがあって、ここに行けば、花や緑、淡路の魅力を楽しめるということであれば、PRもしやすいが、現状ではSNSの一言ではとても伝えきれない。こんなに多くの会場で開催する意義というものがまだ見えていないが、あまり散らばらせるよりも、大きな目玉となる会場やイベントがあったほうが、後に皆の記憶に残るのではないかと思う。また、一般の方へのPRもしやすい。これは、一市民としての意見である。

(事務局)

仰るとおりである。ここが花みどりフェアのメイン会場であるということは分かりやすい形で示していく。また、そのメイン会場に来てもらえれば、このフェアのことが全て分かるというような方法を工夫したい。一方で、体験をしていただくということや、人や観光地を残していくということを考えると、メイン会場だけでは難しいと考えている。例えば、線香ならここ、淡路瓦ならここ、といった場所がある。情報はメイン会場に集約されているが、実際の体験はサテライト会場という形を考えている。表現の仕方については、ご指導いただきながら工夫していきたい。

(中瀬委員長)

2010の最初のフェアは、現在の淡路会場だけで開催した。ところが、その当時は兵庫県には、県民の参画と協働というキーワードがあり、全ての事業に県民が参加するという流れが生まれていた。それを踏まえ、2回目の2015の際には島内の3会場に広げた。さらに3回目の2020になると、集落や漁港といったところまで広げてきたという経緯がある。県民が主役になっての参画という方向性については、かなり長い間話し合われてきたことだが、田中委員御指摘のように、じゃあ集客はどうするのかということは今回議論しなければならない。バスの便や駐車場、交通渋滞などの問題もある中で、どう対応していくのかは、知恵の出どころである。

(田中委員)

本当は会場に行きたいが、どうしても淡路に来ることが難しい方向けのライブ配信や、メディアセンターのようなものは考えているのか。

(事務局)

経費との相談にもなるが、メイン会場には、定点ライブカメラを設置したいと考えている。

24時間、世界中どこからでも見てもらえるようにしたい。小さい画面で見ていると、現地に行きたくなるということもあるのではないかと考えている。

(門野委員)

花と緑というものには、綺麗であるとか、快適であるとか、プラスのイメージを持たれるものだと思う。ただ、その背景には、現在の淡路島の実態として、過疎化や後継者不足、漁業資源の枯渇といった問題がある。現在のSDGsの取組みは、この機会を逃したらもう未来がないかもしれないという極めて追い詰められた状況下で具体的にどう対応するかという非常に深刻なものであると思う。今回のフェアでも、そういった深刻な状況をさらけ出したうえで、花や緑がそれを変えていく力を持つことを示すことができれば、より説得力のある内容になるのではないかと。開催テーマもフェアの内容も、綺麗で心地よいことだけでなく、現実と将来像を繋ぐような内容にしていくことが大事だと考える。

(中瀬委員長)

各イベントにどう落とし込むか、これは実施計画でもかなり議論しなければならない。

(田辺委員)

過去のフェアを見ていると、5年毎に、「継承と発展」というキーワードが出てきている。これまで花と緑で「継承と発展」をしてきて、結果的によくなったのかどうか、効果があったのかどうか。2000年から25年目となる今回で一つの区切りとするのであれば、継承と発展だけでなく、新たな発見や新たな視点という項目が必要ではないか。

(中瀬委員長)

今回のフェアで最後なのであれば、この先どうしていくのか、次の人々に伝えていくようなものが欲しい。それは、実施計画でもより具体的に議論していくことになると思う。淡路島は、環境の面では、日本一の優等生である。掻い掘りをして池の栄養分を海に出すとか、処理場の運転を調整して栄養分を出すなど、ソーラーだけではない地道な取組みもどこかで取り上げていきたい。実施計画では、淡路島で積み上げてきた実績が生きてくるかと思う。

(事務局)

開催理念において、これまで蓄積してきた取組みだけでなく、新たな潮流についても発信していくということを位置づけている。田辺委員御指摘の内容については、実施計画において具体化していきたい。

(光成委員)

中瀬委員長の意見にもあったが、この開催時期は、花の開花状況からすると苦しいところがある。また、開催テーマについても、花と緑を持ち出すには苦しいと思うので、より広い意味でのテーマというものを設けられた方がよいのではないかと。

また、このフェア自体は今回で終わるとしても、フェアが終わった後も活動を続ける方や団体はいる。担い手不足といった話もあるが、開催テーマに「島暮らし」があり、移住者も想定されているのであれば、暮らしやすい淡路島の魅力作りとかインフラ作りといったことも関係してくると思う。国内外で新たな潮流を発信していくだけでなく、淡路島での取組みも

より継続していけるようなきっかけのイベントにできればとよいと思う。

(中瀬委員長)

開催テーマについて、花と緑という言葉はもうみんな使い古してしまったところがあるかと思う。我々は、36億年間の命を繋いでいる継承者であるので、花と緑を包含した意味での命を繋いでいくというニュアンスがいるかと思う。

また、共生という言葉もよく出てくるが、この言葉の意味を理解して使えているのか。我々日本人が使っている共生という概念は、英語にはないため、環境省も英訳に非常に苦勞して議論をしていた。共生という言葉はものすごく意義深い言葉なので、ぜひうまく使っていたらと思う。

(三井委員)

行政の立場で事務局をすることが多いので、難しいと思いながら聞いていた。古田委員の意見はごもっともだが、もう少し対案を出してほしいとか、中瀬委員長の御指摘もごもっともだが、やはり国営明石海峡公園ではチューリップで人を呼ぼうとするだろうとか。

今までの議論では、国営明石海峡公園のチューリップのようなイメージの花と緑はもう古く、自然というのはもう少し広い概念であるという話だったかと思う。私も自然ということで、広げることは方向性としてよいと思うが、それでも、3月20日からということであれば、国営明石海峡公園ではチューリップを推していくことになると思う。そのため、5ページの表の右に具体例の欄を設ける場合に、チューリップは書くのが難しいなど、苦しい思いをしながら聞いていた。ただ、チューリップで人を呼んだうえで、来てくれた人にどういう風にSDGsを絡めて知ってもらおうかということだと理解している。開催テーマについても、花みどりフェアと言いつつも、花と緑ではないんだろうなと感じている。

(中瀬委員長)

「共生の島、淡路、未来に繋ぐ」とかはどうか。適当に言っているが。花緑が全部なくなってしまうか。

(田中委員)

タイトルは花みどりフェアで確定なので、開催テーマでまた花緑をリピートする必要はないと思っている。

また、いのちは大事だと思うが、自然と共生と聞いた途端に、遊びに行きたいというワクワク感は消えてしまう。例えば、過去最大、最多本数のチューリップを集めたとすれば、それだけで何万人単位の人があるが、自然と共生、としてしまうと、それだけの人数は来ないと思う。集客と開催テーマのどちらをとるのか。万博に来る人達が求めているものは、ワクワク感、賑わいだと思うので、その人達が自生する淡路の素晴らしさを楽しみに来るということは考えにくく、集客のブースター機能ということは絶対に無理だと思っている。

ただ、個人的には、淡路島は大好きで、プライベートでも頻りに遊びに来ている場所である。なので、淡路の良さを伝えるイベントとしての意義はかなりあると思う。私は「いのちめぐる淡路島」よりは、「いのちをつなぐ淡路島」のほうがよいと思う。ただ、自然と共生と

聞いて、観光客が何万人来るかというところが心配ではある。

(中瀬委員長)

いのちつなぐ、という言葉はよいと思う。その前に何を入れるか。

(田中委員)

自然もよいと思う。ただ、申し訳ないが、共生という言葉は、観光客に向けて、ワクワク感はない。

(中瀬委員長)

「人・緑・自然」はどうか。

(田中委員)

開催テーマとしてはわかりづらいかもしれない。

(中瀬委員長)

「花と緑の淡路島 いのちつなぐ」はどうか。

(田中委員)

今はグランピングなどキャンプも人気があるのと、コロナ禍で素人の方でも庭づくりに興味を持つようになったので、「自然」という言葉はすごく良いと思う。ただ、「自然と共生」、「生きる」という言葉を使った途端に、庭を作ったり、キャンプをして自然を体感するというイメージからは外れてしまう。まだ思いついていないが、この39日間、どうすれば淡路に来てワクワクしてもらえるか、伝えられるような言葉が出てくればよいと思っている。

(三井委員)

人を呼ぶのであれば、花という言葉を使ったほうがよいのではないかという気がする。人を呼ばなければいけない一方で、理念的なところでは、花だけで人を呼ぶというのはもう古いということがある。相反しているため、言葉遣いが難しい。

(中瀬委員長)

メイン会場はチューリップでよいが、理屈はどうするのかという話。

(高木委員)

メイン会場の3番バッテリーはチューリップでよいと思うが、5ページの表の「継承・発展」の内容が国営明石海峡公園で実感できなければ意味がない。なので、例示でよいので、国営明石海峡公園で、SDGsを体感できるものだとか、そういった具体的なものを示したうえで議論したほうがよいと思う。来場者はチューリップでも満足してくれるかもしれないが、結局テーマが何だったのか分からなくなるのではないか。テーマとイベントの関連が全くなければ意味をなさないと思うので、具体的に考えながら議論をしたほうがよい。

(中瀬委員長)

明石海峡公園には、淡路地区と神戸地区がある。淡路側には、どうしようもない土地が残っており、神戸地区には誰も使わない山が残っていた。その2つを橋がつないでいるというので、2つ合わせて国営公園にしたというのが、簡単な経緯である。淡路側はもう土を取ってしまっ、草木も育たないようなところにあれだけ緑を戻したというだけでも意義があると思

っている。ここをメイン会場にしたならば、そこをベースにしてさらに展開するようなことを考えてはどうか。周囲には、例えば、非常に生物多様性に富んでいる石の寝屋緑地がある。また、神戸にも発信ができる。淡路会場はこれだけ綺麗な花を飾っているけれども、周りにも還元することでよくしていくという展開でもよいのではないかと思っている。夢舞台や国営明石海峡公園でこれ以上を望むのは難しいので、淡路島全体への波及といった視点で議論をするほうがよいかと考える。

(三井委員)

補則すると、委員長の仰るとおり、国営明石海峡公園は、淡路地区と神戸地区の2地区でできており、まさに明石海峡が繋いでいるので、明石海峡公園という名前になっている。淡路地区は、関西空港の埋め立てのために土を全て取ってしまった跡地であり、削られた山に植栽ができるような土を載せて、そこに木や花を植えてつくった公園である。この数十年の間に、土が全部なくなり、植栽基盤など全くないところから、兵庫県も含めて一緒に取り組んできて今の公園があるという状況である。

(高木委員)

なので、例えばだが、今は、土砂の採取前の写真や、採取後のハゲ山の写真が目立つところになかったりするので、このフェアでは、今一度当時の状況や、その後の経緯などを来場者に見てもらおうような展示をする等により、理解してもらえと思う。

(三井委員)

さきほど事務局の言った、展示ブースや体験コーナーというのは、そういったことも含んで言われたものと思う。国営公園でも、どれくらいできるのかということこれから検討していく。そういった体験や展示の内容がもう少し見えてくると、開催テーマとの関連性というものも出てくるのではないか。

(高木委員)

なので、開催テーマを咀嚼するとそういうことだ、というようなことをしっかり固めたうえで、テーマに即したイベントや展示を徹底的にすることができれば、テーマも生きてくると思う。ただの1ヶ月のお祭りのような感じで実施してしまうと、開催テーマと実態がちぐはぐになってしまう。

(中瀬委員長)

例えば、洲本から翼竜の顎の化石が発見されたが、顎以外はどこに行ったかということ、関空の基礎に使われている。また、淡路島は関西中の開発の基礎を作っている。深掘りすると、淡路島には、楽しいエピソードがいっぱいある。そういったネタを探せばよい。

(中瀬委員長)

開催テーマと、集客をどうするのか、頭を悩ませるところである。生物多様性や共生といった言葉を使うと、私の身近な人達はほとんど興味を示さない。ところが、このフェアに来て、少しでも興味を持ってもらえるような場をここで作り、こういうことなんだと感じてもらいたい。そうすると、客を呼べるような開催テーマで人に来てもらい、ここで学んでもら

い、体験してもらおうという形にしておくのがよいかという気がする。

(田辺委員)

花みどりフェアという名前と、議論になっている開催テーマは併存するのか。

(事務局)

併存する。

(田辺委員)

そうすると、開催テーマに花と緑を使うと、被ることになる。

共生という言葉は日本語ではない。共も生も漢字の音読みということは、中国からの外来語である。日本語で言うとしたら、共に生きるということなので、自然と生きるということである。これまでの議論では、自然、いのち、繋ぐという言葉もよいということだったかと思う。それを踏まえると、即製だが、「自然と生きる・いのちをつなぐ淡路島」等はどうか。化石が出てきたことも、土がなくなったところに植物を植えたということも、命が繋がっているということかと思う。

(中瀬委員長)

いいと思う。

(事務局)

「生きる」は漢字でよろしいか。

(田辺委員)

はい。

(事務局)

田辺委員からの提案について、皆様いかがでしょうか。

(中瀬委員長)

今のところ、この案でいくということによろしいか。

(委員一同)

異議なし。

(中瀬委員長)

それでは、開催テーマについては、一旦それで決定させていただく。

次に5ページに関してはどうか。内容としては、記載の通りでよいと思うが、もう少しこの次のプロセスに食い込んでほしい。

(事務局)

表の右に一つ欄を追加して例示を入れていくと実施計画に近いような形になると思う。この委員会終了後に追加し、委員長と調整させていただくということでもよろしいか。

(中瀬委員長)

そうしていただければと思う。

また、玉ねぎについても、もっと勉強するように。神戸の洋食屋を経由して淡路島に来たとか、色んな説がある。タモリさんまで来て、いっぱい褒めてくれた。そこら辺も念頭にお

いて、よろしくお願ひしたい。

【検討議題4、5】（資料1/P8～17）

（中瀬委員長）

8ページ以降について、意見をお願ひしたい。

（光成委員）

会場へのアクセスについて、14ページに「公共交通機関を利用するよう強く呼びかける」とあるが、駐車場の台数がかなり少なくなっているということもあるので、呼びかけるだけでなく、利用がしやすい状況を整える必要があるのではないか。実際に、舞子や三ノ宮から淡路島に來ている方も相当数いるが、わかりにくい要素が多いところである。海外の方々も來られている中で、誰もが分かりやすいような現地での案内や、情報を集約したHP等での情報発信が必要である。

（中瀬委員長）

仰るとおりである。朝の通勤時間帯には、待ち行列が出ている状態である。三ノ宮でほぼ満員になっている。ただ、やっとICOCAが使えるようになったことはありがたい。また、淡路インターでは降りたら非常に殺風景で汚い地下道を通らなければならない。あれでは、來た人が大きなショックを受ける。これは10年言い続けているが、何も変わらない。

しかし、光成委員御指摘のとおりで、計画上はこれでよいのかもしれないが、本当にバスを増便するなり、高速道路のゾーン制をしてもらうなり、その辺りは、こちらからアイデアを出して提案していかなければならない。

（事務局）

具体的なところについては、淡路交通や本四海峡バスといったバス会社とも協議していきたいと考えている。また、分かりやすい表示については、フェアのホームページや、現場での案内等について、事務局において検討していきたい。

（田中委員）

過去のフェアでは、3会場を回るようなループバスのようなものは運行していたのか。

（事務局）

運行していた。

（田中委員）

それでは、今回も運行すると。

（事務局）

検討はしている。

（中瀬委員長）

水を差すようだが、北淡路の周遊バスは、ほとんど乗車されていなかった。なので、今回は相当利便性を高めて、頻度も増やす必要がある。ぜひ今までの経験を踏まえて、検討いただきたい。ただ、金がなければ無理である。

(事務局)

実行委員会が金を出してバスを動かすのか、民間企業の方に利益を求めて動かしていただくのかというところは、今後の交渉になってくる。

(高木委員)

駐車場の台数が大きく減少しているということは、事実としてやむを得ないところかと思う。ただ、公共交通機関の利用を強く呼びかけたところで、行きようがないというのが実態である。この辺りを走っているバスは数種類あり、バンバンバス、パソナの無料送迎バス、コミュバス、一部の路線バス、一部の高速バスがあるが、これらの接続がうまくいっていない。例えばバンバンバスは住宅地で運行されている生活の足であり、観光地には止まらない。淡路インターから降りた時の景色が悪いということもあるが、降りてからどうしたらいいのかということが難しい。3会場のピストンバスも必要かと思うが、今はバラバラに動いているこれらのバスを、フェアの会期中だけでも整理してはどうか。

また、会期中のみならずと言いたいところだが、観光協会としては、高速バスのオープンドア化を強く訴えている。実は、大阪や京都から、淡路島に止まることなく四国に抜けていくバスが多い。これを淡路島でも乗り降りできるようにして、降りた後のレンタカーやカーシェア等も含めて整理できると、遠隔地からの来島にも繋がってくると思っている。観光協会としても取り組んでいくが、やはり行政のバックアップがなければ前に進まないところもあるので、ぜひとも一緒に検討していきたい。とにかく淡路島に行きようがないというのが実態である。

(田中委員)

バスで淡路島のイベントに参加した際、バス停から会場までかなりの距離を歩いたことがある。そもそもバス停が少ないということもあると思うが、ネットで調べた時に、何分にバスが来て、どう接続しているかということがすぐに分かるようになればよいと思う。また、時間を調整するために、例えば、舞子駅経由で淡路島に行く際には、明石海峡大橋のプロムナードで時間を潰して、綺麗な橋の景色を見てもらえるような、セットで楽しめるようなことができれば、利益を得たい民間事業者の方々も参入してくれるのではないか。いずれにしても、高木委員の仰ったように、いろんなバスがあっても繋がっていないのはもったいないので、うまく整理していただければと思う。

(田辺委員)

例えばだが、各市の公民館や文化会館、婦人会館といった各施設を使いたいと思っても、どこが空いているのか一括で分からない場合が多い。バスの路線や接続の問題と同じ話で、やはり、情報は利用者が一括して見られるということが重要である。今は、ただでさえ公共交通機関が不便になっているわけなので、バスの接続調整や情報の一括公開については、この際、フェアの期間中に限らず、尽力していただきたい。

(事務局)

これは民間企業の方に協力いただけるかにもよるが、バスだけではなく、例えば、電動キ

ックボードのような自由度の高く、環境負荷の低い新たな交通ツールについても検討していきたいと考えている。

(中瀬委員長)

馬も忘れないように。

他はいかがか。バスは本当に死活問題である。東浦バスターミナル行きに乗ると、ほとんどのバス停に止まるので、どこにでも行けるが、まっすぐ行くバスに乗るとえらい目に遭う。バスをいつも使う人はよく知っているが、そういう情報がすぐに分かるようになればよい。

(高木委員)

今は、淡路島内では、googleマップよりも精度の高い、バスモというサービスが開発されているため、公共のバスを乗り継いだらどうやって目的地に行けるかというところについては、立派な検索機能ができている。ただ、それで検索していただくとよく分かるが、ここからあそこに行きたいというと、到着が翌朝といった結果がしょっちゅう出てくる。車で移動するよりも3倍時間がかかるとか、あるいは、より現実的な、笑ってしまうような話として、例えば、南あわじ市や洲本温泉に泊まって、北部の観光をしようと思ったら、ほとんどの場合、一旦舞子まで戻らなければならない。北部ではバスがオープンドア化されていないため、素通りしてしまう。それが今の実態である。

(門野委員)

私は、サイクリングで何度か淡路島に渡ったことある。以前は、神戸側から淡路に行く際に、バスに自転車を積むことができたが、今は載せてくれない。海外では、地下鉄や電車等の公共交通に自転車を載せて、行き先で使えるようになってきているが、日本の場合は逆に厳しくなっており、神戸市が実証実験を行っている。個人的には、淡路に入ってから自分の自転車で移動するといったことができれば楽しいと思うので、実現性があるのか分からないが、ぜひ検討していただきたい。

(中瀬委員長)

JRは推進しているのではないか。

(門野委員)

電車であれば、バッグに入れれば積むことができる。

(中瀬委員長)

花とか緑と言っているが、いつの間にか緑のコーディネーターがいなくなっている。ぜひ今回、有能な若手のコーディネーターを1人か2人か置いてほしい。今回の大阪万博でも、私の教え子がコーディネーターを務めている。何をするかと言うと、万博会場に植える植物は山から持ってくるのではなく、万博公園や鶴見緑地から抜き取って持ってくる、そういうことをしている。淡路島で花みどりや銘打っているのに、緑のコーディネーターがないというのは少ししんどいので、それこそ次世代を担うような中堅、若手のコーディネーターを育成するという意味でもぜひ採用していただきたい。淡路花博や大阪の鶴見緑地等は全て、現在夢舞台の温室を管理している芋瀬氏も所属するウィンという会社の、鷲尾金弥氏がプロデ

ユースしたものである。そういった人を育てるという意味で、ぜひお願いしたい。

また、先ほども申し上げたが、やはり石の寝屋等の辺りをこれからどのように考えていくのかということは非常に大事なことであるので、ぜひ頭に入れて検討してほしい。

それから、さきほどの開催テーマ「自然と生きる・いのちをつなぐ淡路島」。こういったテーマの国際フォーラムを企画していただきたい。最近では、なぜか日本人は海外を見ることをものすごく嫌がるが、日本で頑張っている人と海外で頑張っている人をうまくドッキングさせたい。例えば、ニューヨークのハイラインでは、使われなくなった電車の敷地跡を自生種で緑化しており一番の観光名所になっているのだが、それを設計した事務所に、三井委員の同級生の淡路景観園芸学校の生徒がいる。日本では、なぜそういうところが名所にならないのかいつもイライラしている。自生種のしょうもないショボショボした草しか生えていないが、そこに世界中から観光客が押し寄せている。そういう話を日本で頑張っている人々と議論していただければものすごく面白くなる。最近よくテレビにも出演されているCO2の専門家の高村ゆかり先生や、あるいは兵庫県の環境審議会委員をされているゴミの専門家の浅利美鈴先生等、中堅の先生方が多く出てきている。そういう最先端にいる人々に語ってもらう場を作ってほしいというのが私の思いである。ぜひ、今回の会議からは、より具体的名前や名称を出しながら議論できるようなことを考えていただきたい。

(三井委員)

別所氏については、前回の会議でも名前が出ていたため一応連絡を取ったが、次の夏には日本に帰ってくるということであった。春に呼ぶのであれば旅費くらいは出してあげなければならないかもしれないが、個人的に調整はするので早めに言っていただければと思う。私の同級生で、1年で辞めて現在活躍している人である。

また、淡路会場の駐車場については、国営明石海峡公園でもいろんな工事があり、そのためヤードが必要になるので、今回、駐車台数が減少した一因になってしまった。一方で、あそこは使えるかもしれないという場所が抜けていたりするので、実施計画の際に調整させていただければと思う。

(中瀬委員長)

関連して、14ページの④の臨時駐車場の右側辺りに旧国道の跡が残っている。先ほど話があった、まだここに山があつて海側を道路が通っていた頃の痕跡がまだ2~3箇所残っている。そういったところもフェアの展示施設にしたら面白いと思う。

以上